
ボクだけの王女様

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクだけの王女様

【Zコード】

N8406A

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

ある日、事故に巻き込まれた哀を助けたコナンは、8歳から17歳までの工藤新一としての記憶と、江戸川コナンとしての記憶がなくなってしまった！ぜんぜん性格がちがうコナンに、振り回されていく哀達だけど・・・

ACT01・突然の悲劇（前書き）

初めに申し上げておきますが、コナンの記憶がなくなります。故に、あまり殺人事件は起こさないようにしています。

その他の事件は起きたりしますが。

その事について、中傷的コメントが何件も来たので、書きました。今後、そういうコメントを書いたりしないでください。

作者からの忠告

ACT 01・突然の悲劇

突然、今まで親しくしていた人の記憶がなくなつたら、人はどう思うのでしょうか？

きっと、悲しくて悲しくてしかたがなくなるでしょう。

それは、この私、灰原哀もそうでした・・・

ある日、江戸川コナン、灰原哀、吉田歩美、円谷光彦、小嶋元太の5人は、サッカーの事を話しながら、帰路についていた。

元太

「この前の試合、スゴかったよなー！」

コナン

「ああ、ヒテのオーバーヘッドキックだろ？」

光彦

「あれは芸術的でしたよねー！」

歩美

「ヒテ、カツコいいー！」

そんな時、哀が別の方向を向いた。

哀

「江戸川君、私、買い物してから帰るから・・・」

コナン

「ああ、待ってるよ。」

そう言って哀を見送りとしたコナン達だったが、次の瞬間、コナン達は顔色を変えた。

元太

「お、おい、コナン・・・」

光彦

「なんかあの車、思いっきり蛇行してませんか・・・？」

歩美

「あのままじや、哀ひさんぶつかるよー。」

コナン

「！」

哀が交差点を渡ろうとした時、車が蛇行して哀の方へと向かってきました。

哀
「・・・」

哀はもうダメだと、目をつぶつた。

しかし、その時・・・

どうせ飛び出したコナンが、
哀を抱えて反対車線に飛んだ。

デジヤー！

「イタタ・・・」

元太

「口ナシ君！！」

光彥

「大丈夫ですか！？」

元太達が走り寄つてきた。

「江戸川君！」

哀も、心配そうにコナンに詰しかける。

しかし、起き上がったコナンは、とんでもない事を言つたのだ!!

コナン

「あの・・・『江戸川コナン』って、誰ですか・・・?」

ACT02・失われた工藤新一の記憶と知識

コナン

「あの・・・『江戸川コナン』って、誰ですか・・・？」

哀・歩美・元太・光彦

「！！」

哀達4人は、驚いて立ち尽くした。

歩美

「な、何言つてるのよコナン君！？」

元太

「江戸川コナンは、オマエの名前だろ！？」

光彦

「どうしちゃったんですか！？」

コナン

「江戸川コナン・・・？ちがうよ、ボクはそんな名前じゃない・・・ボクは工藤新一、7歳だよ・・・君達は誰？ここはどこ？ボクのお父さんとお母さんはどこにいるの？」

哀はコナンのセリフで、すぐに状況がつかめた。

哀

「吉田さんー博士の家に電話して、米花交差点に来るよつて言つて！おそらく、江戸川君は・・・！」

米花薬師野病院

米花薬師野病院にコナンを運んだ哀達は、医者にコナンを診てもらつた。

阿笠

「やはり、記憶喪失ですか？」

「はい。お嬢さんを助けた時に強く頭を打ちつけたのが原因の一つだと思つのですが、一部の記憶がじつそりと抜けています・・・」

哀

「それで、彼の記憶は戻るんですか？」

「今はまだ、何とも言えません。」

阿笠・哀

「そうですか・・・」

哀は歩美達を家に帰し、コナンを阿笠邸に連れて帰つた。

阿笠邸

阿笠邸で、哀は試してみた。

哀
「イギリスの首都は？」

コナン
「ワシントンですか？」

哀
「 5×9 は？」

コナン
「50かな・・・」

哀

「世界で最初といわれる推理小説の名前と、その作者は？」

コナン

「何ですか？それ・・・」

哀

「コナン・ダイルが生み出した、イギリスの名探偵の名前は？」

コナン

「わからない・・・」

哀は質問をしてみて、確信した。

コナンは江戸川コナンとしての記憶だけでなく、8～17歳までの工藤新一としての記憶までもなくしていたのだった・・・

ACT-03・完全に7歳の子供の新一

それからも哀は1時間ほどコナンに質問をしてみたが、すべてダメだった。

どうやら、小学校1年生以降の知識は完全に吹っ飛んでしまっているらしい。

その上、言葉づかいも完璧に7歳の子供であるのだから、哀は疲れてしまった。

哀

「ああ・・・疲れた・・・」

コナン

「えー、もう?・哀ちゃんもつと遊ぼうよー!」

哀

「ふええ・・・クタクタになっちゃつたよ・・・」

本当なら17歳の高校生だといつのこと、記憶喪失のせいで、今の江戸川コナンは7歳の工藤新一なのだ。

その上、妙に明るい。

哀もさすがに困惑してしまった。

それどころか、コナン、いや新一は、とんでもない事を言つたのだ。

新一

「ねえ、阿笠のおじちゃん。このお姉さんだあれ？」

新一が古いアルバムを見て、興味本意に聞いてきた。

哀はすかさず反応する。

哀

「な、何言つてゐのよ、毛利蘭さんよー覚えてないの？」

新一

「う、うん・・・だつて、こんな年上のお姉さん、ボク知らないもん・・・」

哀はハツとした。

8～17歳までの記憶がないという事は、当然蘭の事に関する記憶も失われているという事だ。

新一はアルバムをソファーに置くと、博士のゲームで遊び始めた。

阿笠

「で、どうするんじや、哀君？」

哀

「どうするってつたつて、記憶が戻らない以上、ここにかくまつしかないでしょ。」

そう哀は言った。

その時、哀の腕を新一がつかんだ。

哀
「え？」

新一
「哀ちゃんもおじちゃんのゲームで遊ぼー！」

哀
「え・・・あ、うん・・・」

哀は新一に引っ張られるままに座布団に座られ、ゲームの相手をさせられた。

哀
「（待てよ・・・今彼が7歳だという事は・・・勝てる・勝てるわ
！――）」

哀はそう思った。

しかし・・・

新一

「やったー、勝ったー！」

哀
「（二、二〇連敗・・・）

記憶をなくしても、ゲームに関する知識は消えてなかつたらしい。

哀は、
ハアア～とため息をついた。

ACT04・その笑顔は反則級（クラス）

その後もゲームは続き、哀は結局全戦全敗になってしまった。

哀

「ガーン……じつして……」

哀はうなだれた。

その時、また新一が哀の腕をつかんだ。

哀

「え？」

新一

「哀ちゃん、一緒に風呂はーこうー。」

哀

「えええへー…？そ、そんな…？…」

哀は顔が真っ赤になる。

「冗談じゃないわと、哀は逃げようとしたが…

ヒヨイー！

新一

「ダメだよ哀ちゃん、逃げちや。」

哀は新一に抱っこされた。

哀

「キヤー！！助けてえー！！」

哀は、なすすべもなくお風呂場へと連れて行かれてしまつた。

新
—

「いい湯だつたね」。

哀

「うう・・・のぼせた・・・」

そつ、哀は新一にドキドキしてしまって、お風呂で鼻血を吹き出しちゃったのだ。

しかし、新一はまったく気にしていない様子。

新一

哀は新一をあらためて見て、その無邪気さとかわいさに赤面した。

新
—

「あ、そうだ。博士、晩ごはんボクが作るねー。」

そいつ言って、新一はタタタと台所に走つていった。

しばらくして、3人は食卓を囲んだ。

メニューは、野菜たっぷりカレーと、玉子と大根の野菜サラダ。どうやら、料理の知識は消えていなかつたらしい。

哀はカレーを口に入れた。

哀
「あ、これおいしい・・・」

新一
「ホントー、哀ちゃん！やつたあ～！」

相変わらず、無邪気な新一。

そんな時、博士が新一に話しかけた。

阿笠

「新一・・・朝ごはんには肉料理も入れて欲しいんじゃが・・・」

博士の欲望が、新一に襲いかかる。

新一

「ダメだよお、博士え！ボクが健康管理してないと、どうなるかわ

からないんだからー長生をして欲しいもんー」

しかし、新一はあつれつ抱合した。

新一はせりやひ、7歳の頃から博士の健康管理のために自炊していったようだ。

哀の不安は、まだまだ続きそうだ。

ACT-05・照れぬ夜はあなたのせい

食器をすべて洗い、食器洗い乾燥機に入れ終わった新一は、玄関に向かって歩き出した。

哀
「どうして？」

新一
「明日の分のお買い物。」

哀
「ええ、もつ行くの？ 明日にした方がよくなない？」

新一

「えへ、普通だよ。阿笠おじちゃんはその日の内に食材買って来いつて、いつも言つて。」

どんな育て方したのよ、博士・・・

哀はため息をついた。

哀
「私もついていくわ。」

新一

「ありがと、哀ちゃん。じゃ、行こ。」

哀

「で、何で行くの？」

新一

「阿笠おじちゃんの最新兵器・ターボ007号で行く！」

哀

「それって、あのスケートボードの事？」

新一

「ううん、ちがうよ。超小型のバイクなの。」

哀

「バ、バイク！？」

新一

「大丈夫だよ、自転車みたいなものだから。」

イヤ・・・博士の事だから、変な機能をいっぱいつけてるにちがいない・・・

哀

「新一君、バイクは危険だわ。スケートボードで行きましょ。」

新一

「うん、わかった。」

哀は新一を後ろに乗せ、米花デパートに向かった。

明日の料理の材料を買つて、私達は帰つてきた。

阿笠

「ああ、もう君が寝なさい。」

哀

「ええ。」

するとい、新一が哀の方を向いた。

哀

「な、何?」

新一

「哀ちゃん、ボク一緒に寝ちゃダメ?」

新一のつぶらな瞳。

哀はその瞳に負けてしまつた。

哀

「い、いいよ、一緒に寝ても・・・」

新一

「やつたあー！」

ベッドに潜り込んだのに袁はなかなか寝付けなかつた。

新一

一
表ちゃん・・・

不意に、新一が寝返りを打ち、その顔を哀の方へと向けてた。

「哀

新
—

今夜はとても眠れそうにない哀。

哀

「明日からまた学校か・・・」

哀れむつづふやせ、田を闇じた。

ACT-06・7歳の新一の恋心

新一が「ナン」としての記憶を失つて、もう3日たつた（事故が起きたのが金曜日で、土日は休みだったため）。

哀は新一と学校に通つ事になつた。

ちなみに、蘭と小五郎には、「ナンは急な事情でいつまでもここにいてある。

哀

「（こつまで）まかしきれる事や、ひり・・・」

哀はそんな事を考えていた。

新一

「じつしたの、哀ちゃん？」

哀

「え？」

新一

「怖い顔してるよ。」

哀

「あ、うう、どう、何でもないの。」

新一

「やあ、よかつたー哀ちゃんは笑顔の方がカワイイよー。」

哀

哀は顔が赤くなつた。

哀は新一に少し質問をしてみた。

哀

「なあに、哀ちゃん？」

「両親と離れ離れでござりたくないの?」

新
—

「うん、全然。袞ちゃんがいるもん！それにお父さん、ボクをアメリカの学校に行かせよ！としてるんだよ？お母さんがアイドルの夢を継ぎなさいって……ボクにはちゃんと夢があるのに……」

哀

「ふーん、どんな夢？」

新
—

探偵とバイト川が両立できたらなって思つてゐるの。」

哀

「じゃあ、一番田の夢は？」

新一

「うん、哀ちゃんのお嬢さんになる事だよ。」

哀

「…………え…………」

哀は、また顔が赤くなつた。

哀

「新一君、私の事好きなの？」

新一

「うん、ダーリ好きー！」

そう言つと、新一は哀の頬にキスをし、タタタと走つていった。

哀

「うう…………ギリしてかしぃ…………ともだちがギリしちゃつてる…………」

哀は赤面しながら、新一の後を追つた。

ACT07・かわいい男の子、新一

帝丹小学校では、「ナン、いや新一の人気が急上昇していた。

記憶をなくす以前の新一も、よく女の子にモテたものだが、今の新一はその頃よりも数倍優しくなっている。

以前にもまして、新一に想いを寄せる女の子が増えていった。

もちろん、その中には歩美や哀も含まれている。

ただ、新一は歩美や哀に対しては、他の子とはちがう接し方をしていた。

少年探偵団の仲間だから、といつもあるのかもしれないが。

そんなこんなで、給食の時間になった。

哀はゆっくりと給食を食べていた。

その横で、新一がふるえていた。

哀

「ど、どうしたの？」

新一

「ボクの嫌いなレーズンが入ってるの・・・哀ちゃん、食べて・・・」

「

新一がつぶらな瞳を見せる。

哀は、またその潤んだ目にやられてしまつた。

哀

はいはい、食べてあけるわ・・・

哀はレーズンを全部食べた。

新一

新一はまた哀の頬にキスをした。

「哀」

哀はまた赤面した。

学校からの帰り道、袞は新一と並んで帰っていた。

新

新一は走り出しつとした。

「あ、待ってー！」のバッジを持って行きなさい。」

哀は新一にバッジを手渡した。

新一

四

卷之三

哀は答えた。

「衷心、ありがとうございます！」

新一はとびきりの笑顔で、走つていつた。

ACT 08・新一、誘拐される…！

新一はたくさんお菓子を買い込むと、阿笠邸に向かって急いでいた。

新一

「ルンルン 哀ちゃんにいっぱい食べてもらつんだ」

新一は満面の笑顔で、走っていた。

そんな彼を、後ろからついている者がいた。

「へへへ、あのボウヤ、カワイイな。よし、あの子を誘拐するか・・・」

男はどこかに電話をかけると、新一の後を追つていった。

新一

「もう少しだ！」

新一がそう言った時、後ろから男が話しかけてきた。

「ちょっといいかな、ボウヤ。」

新一

「なあに、おじちゃん。」

「おじさん、道がわからなくて、困ってるんだ。よかつたら、教えてくれないかな?」

新一
「うん、いいよ。」

新一は疑いもしない顔で、それを引き受けた。

新一
「おじちゃん、どこに行きたいの?」

「えーとね・・・」

2人が話をしていると、2人の横にゅつくつと車が近づいていた。

次の瞬間、中から飛び出してきた男が、一瞬の内に新一の口をハンカチで塞いだ。

新一

「うつー...」

そしてもう一人の男が、新一の足を抱え上げる。

新一

「うつー、うつー!」

ジタバタもがく新一を、2人の男が車の中へと引きずり込んだ。

新一

「うう・・・」

ほどなく、新一は眠ってしまった。

新一

「ん・・・」

次に目が覚めた時、新一は車の中にいた。

新一

「ん・・・んんっ・・・」

新一は体を動かしてみるが、体は動かない。

そう、新一の手足はロープでグルグル巻きに縛られ、口にはガムテープが貼られていたのだ。

新一

「ん〜、んむう〜！〜」

新一は、力なくもがいていた。

新一

「（辰ちゃん……助けて……助けてえ～っ……）」

ACT-09・哀と新一、監禁されるーー！

哀

「遅い……遅すぎる……」

哀は、腕時計を何度も見ていた。

哀

「まさか、彼の身に何かあつたんじゃ……？」

やつかった哀は、阿笠邸を出た。

哀

「い、これは……」

少し走った哀は、道ばたに買い物袋が落ちていたのを見つけた。

哀

「やつぱり、新一君……」から、誰かに……」

哀は袋を阿笠邸の玄関に置くと、ターボエンジンつきスケートボードに乗り込み、追跡メガネのスイッチを入れた。

哀

「待つてて、新一君……」

哀はスケートボードで駆け出した。

しばらく進むんだ哀は、寂れた工場にたどり着いた。

哀

「…………新一君が…………」

哀は、意を決して中に踏み込んだ。

哀

「…………」

哀の目に留つたのは、縄で手足を縛られ、口をガムテープで塞がれた新一だった。

新一

「ん、んんむうん！（あ、哀ちゃん！）」

哀は新一に駆け寄ると、口のガムテープをはがした。

ペニッ・・・

新一

「イタタ・・・哀ちゃん・・・」

哀

「待つてて、今ほじいてあげるかひ・・・」

新一の繩をほじいひとした哀は、背後から近づいてきていた影に気がつかなかった。

ドカッ！

哀

「うう・・・」

哀は後ろから殴られ、気絶してしまった。

新一

「哀ちゃんー哀ちゃんー！」

哀

「う・・・」

新一の声で、哀は目を覚ました。

哀

「あ、新一君・・・」

新一

「大丈夫？哀ちゃん・・・」

哀

「大丈夫じゃないみたいね・・・殴り倒されて、手足を縛られちゃつたわ・・・」

新一

「『ハハ』のを、『ミイラ取りがミイラになる』って言つんだらうね・・・」

哀

「ハハ・・・『めんなさい・・・』

哀は、うつむいた。

ACT10・不安な新一と余裕の哀

2人組の男に誘拐された新一と、助けに行つて殴り倒された哀。

2人はロープで手足を縛り上げられ、一室に閉じ込められていた。

哀

「誘拐の目的は、おそらく身代金・・・身代金を受け取つたが最後、私達は用無しでしょうね・・・」

哀は冷静につぶやく。

新一

「そ、そんない〜・・・ボク、殺されるのヤダよ〜ーまだ哀ちゃんも一度もテートしてないのこ〜〜!〜」

新一は泣き出してしまつた。

哀

「(ヤ、ヤバ・・・)

哀は慌てて、新一をなぐさめる。

哀

「な、泣かないで、新一君!私が必ず助けてあげるから!」

新一

「うん・・・」

新一はやつと泣き止んだ。

哀

「（いけないいけない、今の新一君は7歳の子供なんだつた……）」

「

哀は新一を落ち着かせると、少しつつむこた。

哀

「（とはいつたものの、どうする……？手足を縛られてる、この状態じゃ……あ、そうだわ！）」

哀は新一コシとするとい、新一の方を向いた。

哀

「新一君、私達助かるわよ！」

新一

「え？ で、でも哀ちゃん、ボク達手足縛られてるんだよ？」

哀

「確かにそうだけど、2人一緒に背中合わせにされて縛られてるケじゃない……」（れなら、博士の新発明で何とかなる！）

哀はやつと泣くとい、あつといづ間にロープを切り裂いた。

バサツ……

続いて哀は、新一の縄をほどきにかかる。

ほどなく、新一は縄から解放された。

新一

「哀ちゃん、何をしたの？」

哀

「ああ、これのおかげよ！」

やつ言つと、哀は新一にそれを見せた。

哀

「博士の新発明、『ボタン式仕込み刀』！腕時計型麻酔銃に改良を
加えて、ボタン式で飛び出す小さな仕込み刀を入れたのよ！」

新一

「阿笠おじちゃん、スゴいや！それで哀ちゃん、あの2人組どじし
よつ？」

哀

「やつねえ・・・」

哀はしばりく考え、手をポンと叩いた。

哀

「閃いた！名づけて、『月に代わってお仕置きよ』大作戦！――」

新一

「ハアア！――？」

ACT11・哀の『円に代わってお仕置きよ大作戦』大作戦

新一

「『円に代わってお仕置きよ大作戦』? 何それ?」

哀

「ああ、某有名少女アニメの決めゼリフよ!」

新一

「ふーん……」

哀

「ちやーんと作戦があるんだから」

その時、笑い声が聞こえた。

哀

「アツハツハツ、甘いわね！それは『身代わりゴム人形』よー！」

A

「な、何!? どこから声が・・・」

B

「兄貴、上です！！」

A

「な、何!?」

男達は上を見上げた。

少し小さなロッカーの上に、哀が颯爽^{さつそう}と立っている。

新一は哀にしがみついているが。

A

「オ、オマエ達何者だ！?」

哀

「ひとつ一夜一夜に人見^{じる}お・・・」

哀はワクワクしているのか、うれしそうにしゃべっている。

さしづめ、こうこうのをノリノリとこうのだろう。

新

ふ、
2つ、富士山麓にオームなく・・・

しかし、新一は恥ずかしいらしく、セリフも棒読み状態だ。

哀

みんなの憧れ美男美女カツブルウ！」

哀は、さらにテンションが上がっていく。

新

新一はいまだに棒読み状態だ。

哀

「ほのかちゃん、聴かかしこよね。。。。」

新一は、顔が熟れた赤リンゴのよつ赤く染まっていた。

さしずぬ、ゴーティダゴ。

A

「ふ、ふざけやがつてー降りてーじーーー」

哀

「ええ、今から降りてあげるわよ・・・出でよ、ワイヤーグリップ
！」

哀は天井にワイヤーを突き刺すと、新一を抱き抱えた。

哀
「それえええつ！！」

哀は新一を抱え、飛び降りた。

ヒュオオオッ！

ドガアッ！！

A
「があつ！！」

男Aは哀に蹴飛ばされた。

B
「二、二の・・・」

新一

「え、えい！」

pus!

B
「フニーヤ・・・」

男Bも、新一に麻醉銃を撃たれて氣絶した。

哀

「この強化版伸縮サスペンダーで、ガツチリと縛つて・・・」

新一

「よいしょ、よいしょ・・・」

哀と新一は、男達を縛り上げた。

ギュッギュ！

哀

「これにて、一件落着ね！！」

新一

「あ、哀ちゃん・・・」

哀は笑顔のVサイン。

新一は、ずっと赤面していた・・・

ACT12・美和子と涉と新一と哀

哀と新一は、誘拐事件の重要な参考人として、警視庁に呼ばれていた。

佐藤

「江戸川新一君って言うのね。私、佐藤美和子。」

高木

「ボクは高木涉。よろしくね。」

佐藤と高木は、あくまで新一には初対面に振る舞つてほしいと哀に頼まれていた。

新一

「よろしくね、美和子お姉ちゃん、涉お兄ちゃん。とにかくで、美和子お姉ちゃん達つてつき合つてるの?」

新一は、屈託のない笑顔でたずねる。

佐藤・高木

「ええ!?」

2人は顔を見合わせ、赤面した。

新一

「図星だね!」

2人は、なおも赤面中。

新一は、クスクスと笑つた。

哀

「（新一君、とってもいい笑顔ね・・・）この状態が長く続けばいいんだけど・・・」

哀はそう思しながら、新一と共に事情聴取を受けた。

そしてその帰り道・・・

新一

「美和子お姉ちゃんと恭子兄ちゃん、とってもハッピーさんなんだね！」

哀

「え、ええ、そうね・・・」

新一

「ホールインはいつかなあ？」

新一の言葉に、哀はすかしに笑つてなつた。

哀

「・・・」

新一

「ボクと哀ちゃんも、いつかああなるのかな？」

哀

「え・・・？」

新一

「ボクは本当に哀ちゃんが好きなんだよ。でも、その後つてびじつな
るのかな？ボクにはよくわかんないや・・・」

哀

「新一君・・・」

哀は新一の手をつなぎ、家に帰った。

阿笠邸

阿笠

「おお哀君、お帰り！」

哀

「ただいま・・・」

新一

「阿笠おじやん、ただいまーー。」

阿笠

「おおやうじや、哀君。さつき大阪から電話があつてな、平次君が
「えーーー」のややこしい時に。。」

哀

また何か起きやうな気がした哀であつた。

ACT13・服部平次との再会

阿笠

「大阪から電話があつてな、平次君がこいつに来るそつじやよ。」

哀

「ええー? もう、このややこしい時に来るだなんて・・・タイミング悪過ぎよ・・・」

そんなワケで、哀は東京駅まで平次を迎えて行く事になった。

そして、なぜか新一もついてきたのだ。

新一

「平次お兄ちやんつて、関西で有名な高校生探偵なんじょ? 早く会いたいなー!」

新一ははしゃいでいる。

哀

「(新一君・・・服部君の記憶まで失っているのね・・・)」

そんな事を思いながら、哀は東京駅に急いだ。

東京駅

平次

「すまんなあ、姉ちゃん。休日に引っ張りだして・・・」

哀

「まつたくよ。」

新一

「哀ちゃん、平次お兄ちゃんと知り合いなの？」

平次

「はあ？ 何言うてんねん？ オマエかて知つとるやろ？」

平次は怒ったように叫つた。

新一

「ひく・・・ひく・・・ボク本当に知らないんだもん・・・グス
ン・・・」

新一は泣き出した。

哀

「あー、泣かした泣かしたー！」

平次 「わー、わーーお、落ち着いてくれ、頼むから・・・」

新一 「じゃあ、何かじかそつして!」

平次 「いいつーー?」

哀 「そうね、子供を泣かした罰だもの、何かおいってもらわなきゃねえー。」

平次 「わ、わかった・・・なんかおいしたるから、勘弁してくれ・・・」

哀 「新一君、それでいい?」

新一 「うん。わーい」

新一 「ははしゃぎだした。」

平次 「(勘弁してくれ)・・・これでまたオレの「づかこが飛んでもーたあ・・・)」

実は平次、この前も幼なじみの遠山和葉を怒らせてしまって、その六

埋めのためになけなしの「づか」を使っていたのであった。

哀

「（自業自得よ。クスッ）」

哀もクスクス笑った。

平次

「あああ～・・・」

平次はなかば落ち込んだ。

ACT14：レストランでのつかの間の休息

レストラン『ONNIY-S』

新一

「パクパク、モグモグ、ゴクゴク・・・おいし〜」

平次

「う・・・」

哀

「も、ものすごい食欲だね・・・」

今的新一は7歳の子供の状態。

子供は育ち盛りのせいか、食欲も旺盛なのだろう。

そのため、新一に大量に料理を注文されてしまい、平次は困っていた。

平次は冷コーヒー（アイスコーヒーの事）しか頼んでいない。

ちなみに、哀はレモンティーを注文していた。

新
—

「良ちゃん、一緒に食べよ~。」

四

「え、いいの？」

新
—

三

哀

哀は平次をチラリと見てから、新一の隣の席に行き、一緒に料理を食べ始めた。

哀

「これ、おいしいわね。」

新

「はい、哀ちゃん！ あーん

新一はカレーのスプーンを持ち、哀に差し出した。

哀

力アアアアア・・・

哀は顔が真っ赤に染まる。

哀

「（ま、今回だけはいつか……新一君に甘えよう……）あ、あ
ーん……」

哀は口を開けた。

新一

「はい」

新一はカレーのスプーンを哀の口に入れた。

パク！

哀

「モグモグモグモグ……お、おいしい……」

新一

「やつたあ～……」

哀

「（なんか、幸せえ……）」

哀は照れながら、新一と食べさせ合いつゝをしていた。

その目の前で、平次がガツクリとショゲていた……

平次

「うう……（銀行にお金を引き出さんと、オレ破産する……）」

平次はそう思った。

ACT15・平次VS銀行強盗――

新一
「おいしかった～！」

哀
「ホントね！」

平次
「さよか・・・そりよかつたなあ・・・」

哀
「あら、服部君機嫌悪いの？」

平次
「当たり前じやーー（4500円やぞ、4500円ーー普通、昼間
にそんだけ食うかあーー？）」

平次はイライラしていた。

平次

「とりあえず、オレは銀行でお金引き出すからなー！」

哀

「はいはい。」

平次

オレは手續あるから、オマジンの邊で待つ」とわざと

新一·哀

平次は窓口へと走つていつた。

數分後

「125番の方へ。」

平次

「はーい。」

平次は窓口に行つた。

「えーっと、これとこれとこれね。」

「お願いしま・・・」

平次がそこまで言つた時、窓ガラスが割れた。

ガシャーンッ！！

平次

「な、何やー？」

次の瞬間、3人組の男達が中に入ってきた。

「動くんじゃねえーー！」

「両手を上げて、その場に立てーー！」

「騒ぐとぶつ放すぞーー！」

平次

「（銀行強盗か・・・樂勝やな・・・）」

平次はそう思ふと、前に飛び出した。

平次

「オマエら、ちょー待てや。」

「ん？」

「何だ、オマエは？」

平次

「オレは西の高校生探偵、服部平次やー！そんじょそちらの警備員よ
り、よっぽど強いでー。素直に降参した方がええんとちやうか？」

「ふざけるなー！」

男達は平次に襲いかかつたが、平次は小さな棒で応戦した。

平次

「たあああーー！」

ビュッ！

「く・・・」

「ハイツ、やるな・・・」

「どうする・・・おー！」

男達は次の瞬間、平次の思わなかつた方向に走り出した。

平次

「あーー！」

その先には、ふるえてうずくまつている新一と、彼を落ち着かせて
いる哀の姿があった。

ザツ！

新一・哀

「えー？」

「ボウヤ達、ちょっと来てもらおうか？」

やつらつと、男達は哀と新一をその手に抱えた。

平次

「し、しもた！…」

「いいか、動くなよ？兄ちゃん！」

「！」のボウヤ達を殺されたくなかったらなあ！」

平次

「ぐ・・・」

「あばよー。」

男達は平次を振り切つて銀行を飛び出ると、止めてあつた車に哀と新一を押し込んで、走り去つていった。

ACT16・人質にとられた新一と哀

新一と哀を人質にとつた強盗団は、米花町を車で疾走していた。

「つまくいったな。」

「ああ、西の高校生探偵服部平次がいたとわかつた時は、どうしようかと思つたが・・・」

「ちよつといじりに、このボウヤ達がいたからな・・・」

「オレ達が無事に逃げ仰せるまでは、おとなしくしていともりおつぜ。」

運転席と助手席にいる男と、後部座席にいる2人の男が会話をしている。

強盗団は、4人組だつたのだ。

後部座席の2人にはさまれて、新一と哀が座つている。

幸い、今は縛られてはいない。

新一

「（哀ちゃん・・・ボク、スゴく怖いよぉ・・・）」

新一はふるえて、哀にしがみついていた。

哀

「（大丈夫よ、新一君……必ず服部君が助けに来てくれるわ。）」

やつらふやくと、哀は横の男に話しかけた。

哀

「あなた達、私達をどこまで連れていいくつもり？」

「ホウ、お嬢ちゃんは怖がつていよいようだな……」

「オレ達が怖くないのか？」

哀

「怖いワケないでしょ。私はこの子を守らなきゃいけないんだから。
・・・」

哀はキッパリと言ひ放つた。

新一

「哀ちゃん・・・」

「フフフ、強気だねえ・・・やつらの、オレ達は好きだよ・・・」

「ああ、アジトに着いた。降りるんだ。」

車が止まつて、男達はまず新一と哀を降ろした。

新一はまだ、哀にしがみついている。

「 」に入ってるんだ。 「

男達は新一と哀を一室の中に突き飛ばした。

「 」おとなしくしておけよ。 「

哀

「 あなた達、私達を縛つておかなーいの? 私達、逃げちゃうわよ? 」

「 フン、カギをかけておくし、この部屋にせなもない・・・そんな事は平氣なのさ。 」

「 後でちやこと、ロープを持って来る。いいか、妙なマネはするなよ。 」

男達は新一と哀を一室の中に突き飛ばした。

ACT17・囚われの身の新一と哀

哀

「さて、と・・・」

哀は歩き出ると、扉をガチャガチャと動かした。

ガチャガチャ・・・

哀
「ダメだわ・・・しつかりとカギがかけられてる・・・新一君、窓はどう?」

新一

「ダメだよ、哀ちゃん。」この部屋、元々窓を必要としない部屋だったみたいだね。」

哀

「あーあ・・・本当に閉じ込められちゃったみたいね・・・」

新一

「哀ちゃん、どうしよう?」

哀

「大丈夫よ、新一君。幸いここは携帯電話の圏外じゃないみたいだし、今は体も縛られてない・・・服部君にメッセージを伝えるのなら、今しかないわ。」

新一

「やつだね。いつまたアイシラが戻つてくるか、わかんないもんね。
・
・

哀
「じゅわい、ijiは何かの施設のよつね。何か手がかりがあればな
あ・・・」

新一
「あー哀ちゃんーijiー壁がちょっとだけ砕けてて、外が少しだけ
見えるよー」

哀
「ホントー。」

哀は新一に駆け寄つた。

哀
「下には降りられそう?」

新一

「ダメ、ijiは5階の部屋みたい・・・」

哀

「そ、そつ・・・それで、何が見えるの?」

新一

「わづかだけど、『杯戸』の文字が見える・・・」

哀

「じゃあ、私達杯戸町内にいるのね!」

哀は携帯電話を取り出すと、平次に向けてメールを打った。

『私達は杯戸町内にいます。探偵団バッジを頼りに、予備の追跡メガネで探しに来てください。』 哀

哀はメールを送信した。

「待たせたな。」

哀・新一

「！」

男達が部屋の中に入ってきた。

「お望み通り、ロープを持ってきてやったぜ。」

男達はニヤニヤしている。

哀

「・・・」

「さてと、お嬢ちゃん達を拘束しておくれ。」

男達はロープを持って新一と哀の後ろに回ると、後ろ手に手首を縛つてから、2人一緒に手足をグルグル巻きに縛り上げた。

ACT18：2人の身代金は5億円

その頃、米花銀行には、目暮と高木、佐藤が到着していた。

目暮

「何だ、服部君じゃないか。こっちに来てたのかね？」

平次

「あ、ああ・・・」

高木

「それで、状況は？」

平次

「犯人は3～4人の強盗グループ。被害金額はないけど、コナン君と哀ちゃんが連れ去られてしまた・・・」

佐藤

「ええっ、コナン君と哀ちゃんが！？」

平次

「オレが油断しどたせいや。犯人達を倒す事ばかりに気を取られて、あの2人の事を守つてやれんかった・・・」

目暮

「服部君、大丈夫。2人は必ず助け出すよ。」

ピコリ・・・ピコリ・・・

高木
「け、警部！かかつてきました！！」

田暮

「つむ。」

田暮は受話器を取つた。

田暮

「もしもし？」

「まつ、警視庁の田暮警部出ましですか・・・」

田暮

「2人はどうした？」

「心配しなさんな。2人仲良く、おとなしくしますよ。」

田暮

「それで、要求は何だ？」

「・・・5億円だ。」

田暮
「何！？」

「この2人の身代金は、5億円だ。」

平次

「警部、貸せ！？」

平次は目暮から受話器を引つたくつた。

平次

「コラア！…オマエら、ふざけどんのか！？」

「ふざけてなどいない。至つてマジメだよ、平次君…」

平次

「な、何やと…」

「この2人は、今までにもいくつもの殺人事件を解決してきてるんだ。この子達を助けるためなら、5億円ぐらい、安いものだろ？」

平次

「く…わかつた…お金は銀行に用意させる…」

「それでいいんだよ、平次君。」

ACT19：平次、犯人との交渉

平次 「それで、誰に身代金を持つて来させのつもりや？」

「そりだな。君が身代金を持つてこい。」

平次 「な、何！？」

平次 「元はといえば、君のせいでこの子達は捕まつたんだ。君が責任を取るべきだろ？」

平次 「ぐ・・・わかつた・・・それなら、最後に2人の声を聞かせろ・・・」

「無事だとわからなきや、交渉には応じないつてワケか。いいだろう。」

男は携帯電話を新一と哀に近づけた。

新一 「へ、平次お兄ちゃん・・・」

哀

「は、服部君？」

平次

「コナン君、哀ちゃん！無事か？」

哀

「ええ、今は何とか大丈夫・・・あ・・・」

「話は終わりだ。いいか、必ず5億円を用意しとけよ。2時間後、またかける。」

男は電話を切つた。

日暮

「逆探知はできたかね？」

高木

「ええ、おそらく杯戸町近辺かと・・・」

平次

「2人とも、必ず助けたるからな・・・ん？」

平次のポケットが光っていた。

平次

「メール？」

平次は携帯を見た。

平次

「こ、これは！！」

一方、新一と哀は・・・

新一・哀

「うあん、うあん！うあん、うあん！！」

新一と哀は口にタオルを巻かれ、口を塞がれていた。

新一・哀

「うううん！！」

2人は必死にもがいていた。

「とにかく、兄貴。あのボウヤ達、どうすんだ？」

「そうだな。今は人質だが、身代金さえ受け取れば用はない。」

「運んできた少年もろとも、永遠におねんねしてもらおうぜ。」

「ハツハツハツ！」

ACT20・犯人達の新たな企み

しばらくして、男達が部屋に入ってきた。

新一・哀

「！！」

「よお、おとなしくしてるか？」

新一・哀

「う～ん、う～ん！！」

新一と哀は叫び声を上げたが、さるぐつわのせいでの声にならない。

新一・哀

「う～ん、う～ん！！」

新一と哀はジタバタともがいたが、2人一緒に縛られているため動くに動けなかつた。

新一・哀
「う～ん・・・」

新一と哀はうつむいた。

「へへへ、カワイイな・・・」

新一・哀
「んむうん！」

「ん？ どうした？」

「何か言いたいのか?」

新
—
哀

h
h
h
r

「さあ、それなくして外して置こうのだな。」

「そ二、な、の、だ、」

新一・哀

「 しょ
うが
ないな、
少しだけ
だぞ。」

そう言うと、男達は新一と哀のさるぐつねを外した。

なんた?

新一卷

お願い！綱を引いて！！

「それはダメだ。

一 ほどいたら、逃げるかもしけないからな。

新
一
·
哀

「そ、そんなあ・・・」

「甘いぜ、オマエら。」

哀

「そ、それより、どうこう事なの？私達の身代金が5億円だなんて・
・」

「これでも、まだ安い方なんだぜ？」

新一・哀

「えー？」

「君達なら、10億円でもまだ安い。」

「銀行がそんな簡単に10億もの大金、用意できないからな。」

「今回ま、5億円で手を打つってだけだよ。」

哀

「一、今回まー？」

「君達にはもうじき、人質でいてもらつ。」

哀

「な、何ですってー？」

「オレ達は今から、次に運ぶ場所を決めて相談する。」

「まあ、しづらへおとなしくしてることだな。」

そう言つと、男達は隣の部屋に移動した。

ACT21・新一と哀、大ピンチ！！

男達は、新一と哀を次に運ぶ場所について相談をしてくる。

新一と哀は何とか壁にもたれ、そつと聞き耳をたてていた。

「次はどうに運ぶんだ？」

「やつだな・・・」

「鳥矢町はどうだ？」

「それより、奥穂はどうだよ？」

「つーむ・・・」

新一と哀は、ジッと会話を聞いている。

「よし、利善町にしよう。あそこにはオレが所有してる山小屋があるんだ。」

「じゃあ、そこで決まりだな。」

哀

「（よし、利善町の山小屋ね・・・）」

哀はメールを打とうとした。

しかし、次の瞬間新一と哀はドサッと倒れた。

実は2人がもたれていたのは部屋のドアで、男達がドアを開けたため、バランスを崩してしまったのだ。

「オマエ達、何してん?」

新一・哀

「あつ・・・」

新一と哀は顔をひきつらせた。

「あ、携帯電話!-!」

「コイツら、携帯電話を隠し持つてやがったのか!-!」

「ふざけやがって、今すぐ殺してやる!つか?」

男3人は2人に拳銃を突きつけた。

新一・哀

「う・・・」

「まあ待て。人質を殺したら元も子もないだろ?」

リーダーらしき男が、3人を制した。

「ボウヤ達、一度とこりうこりう事はしないでくれよ。」

新一・哀

「う、うん・・・」

「よし、いい子達だ。」

男はそう言つと、ガムテープを取り出し切り取つて、新一と哀の口に貼り付けた。

そして新一と哀を立たせ、隣の部屋から大きなタオルを持ってくると、タオルで2人の体をくるみ、包み込んだ。

「よし、運び出せ。」

男達は新一と哀を連れ出しビルを出ると、止めてあつた車の後部座席の中に再び2人を押し込んだ。

ACT22：2人の救出作戦

新一と哀が再び連れ出された頃、平次は阿笠邸にいた。

平次

「博士、あのメガネの機械、予備あるんか？」

阿笠

「犯人追跡メガネの事じゃな？ああ、ちゃんと用意してあるぞ。今取つてくる。」

そう言って阿笠は研究室に走つていった。

数分後、阿笠は犯人追跡メガネをひとつかんで戻ってきた。

阿笠

「ホレ、これが犯人追跡メガネじゃ。」

平次

「サンキュー博士。」

平次は阿笠からメガネを受け取つた。

阿笠

「ああ、それとな。ずいぶんと使っていなかつたが、よかつたらこれも持つて行け。」

そう言って、阿笠は2つの発明品を平次に渡した。

平次

「なんや、これ？」

阿笠

「伸縮サスペンダーと、ボイスレコモンジャーじゃ。ずいぶん放つていたから多少ホコリをかぶつておるが、はたけばまだ使えるじやろ。」

阿笠は2つの発明品のホコリをはたいた。

平次

「ゴホゴホ・・・博士、これはどう使つんや？」

阿笠

「伸縮サスペンダーは、真ん中にあるボタンでゴムが伸び縮みする。ボイスレコモンジャーは、どんな人の声でも出せるぞ。」

平次

「工藤の持つてる変声機みたいなもんか。ほな行こか、博士。」

阿笠

「おお、運転は任せておけ！..」

阿笠のワーゲンは、現在杯戸町を走つてゐる。

一応、身代金もカバンの中に入れてある。

平次

「博士、もつちよこ速つ走らりへんか?」

阿笠

「これが精一杯なんじゃ……それより、発信機の反応はどうなつておる?」

平次

「そやな……ん? 発信機の反応、移動しとるで……」

阿笠

「何?」

平次

「なるほどな。2人を別の場所に運ぼうつて腹か……利善町に向かつてるで……」

阿笠

「よし、それじゃあ田暮警部達に連絡しよつ!」

平次

「ああ、今度こじつ人を助けるで!」

ACT23・2人の救出、そして新一の記憶復活！！

新一と哀を乗せた車は、利善町の別荘にたどり着いた。

車から降りた4人組の男が、手足を縛られ口を塞がれた新一と哀を運び出し、小屋の中へと連れ込んだ。

新一
· 哀

モード・モード

「フフフ・・・」

「カワイイボウヤ達だ。」

「なあ、もうちょっと身代金をもらわねえか?」

水經注 卷之十一

「」のボウヤ達の役目も、後少しつてワケか・・・

新一
· 哀

「 んむう～、 んむう～ ・・・」

「カワイそつだが、しかたないよな・・・」

数分後、平次達は別荘にたどり着いた。

阿笠

「犯人からさつき連絡があつて、ここに持つてこいと言つておつたよ。」

目暮

「一網打尽にするチャンスだ。」

平次

「そうか。待つとれよ、2人とも・・・」

「そろそろ身代金を持つてくる頃だな。」

「さて、ボウヤ達の役目はここまでだ。」

男達は、拳銃を2人に突きつけた。

「悪いけど、死んでもううよ。」

新一・哀

「ん、んんん～・・・んんむう～ん・・・」

新一と哀は首を左右にふり、必死にもがいた。

「フツフツフツ・・・」

その時、叫び声が聞こえた。

「そこまでだ！オマエ達は完全に包囲されている……武器を捨てて、投降しろ……！」

「ヤベ、サツだ！！」

「逃げなきや……」

平次

「たああーっ……」

犯人達が慌ててるスキに、平次が木刀で犯人達を殴り倒した。

平次

「工藤！哀ちゃん！……」

平次は2人に駆け寄ると、繩をほどいた。

新一

「平次お兄ちゃん……ん……」

新一は気絶した。

平次

「工藤！」

哀

「工藤君！」

「ついて、銀行強盗の4人組は無事逮捕された。

そして新一は、米花薬師野病院に運ばれた・・・

阿笠

「どうですか、先生?」

「驚きましたよ・・・! ボウヤの記憶は、完全に戻つてあります!」

「!」

平次

「ホンマか!..」

哀

「よかつた・・・」

阿笠

「哀君、病室に行つてやれ・・・」

哀

「うん。私、行つてくるね・・・」

平次

「(がんばれや、姉ちゃん・・・)」

ACT24・哀の記憶とナランの返事

哀は、新一の病室にたどり着いた。

哀

「（工藤君の記憶が戻った……これがうれしこのは事実だよ……だけど……だけど工藤君は、やつとあの時の記憶もなくしてこる……私と過ごしてきた、あの日々も……私にたいする、あの気持ちもすべて……どうして……どうしたらいいの？私……）」

哀の脳裏に、新一の言葉が浮かび上がってきた。

『哀ちゃん、一緒にお風呂なーこいー。』

『哀ちゃん、ボク一緒に寝ちゃダメ？..』

『哀ちゃんは笑顔の方がカワイイよー。』

『哀ちゃんがいるから、遊びしないよー。』

『ボクの夢は、哀ちゃんのお嬢さんになる事だよー。』

『ボクは本当に哀ちゃんが好きなんだよ。でも、その後ってどうなるのかな？』

『ボク、哀ちゃんがダーイ好き！！』

哀
「…うん…！」

哀は心を決め、ガラッと扉を開けた。

コナン
「…・・・」

哀

「工藤君、記憶が戻つてよかつたね。おめでとう…・・・工藤君、私はね、出会つた時からあなたの事が好きだつたの…・・・本当に本当に、大好きだつたの…・・・あなたが記憶をなくして、無邪気になつて…・・・私にいっぱいアプローチしてくれたよね？私、とつてもとつてもうれしかつたよ…・・・もうあの頃の記憶はないけれど…・・・私への恋心はないけれど…・・・せめて、せめてね…・・・私があなたに恋してた事、これだけは覚えていてほしい…・・・それじゃあね…・・・さよなら…・・・」

哀は病室を出でこいつとしたが、コナンに呼び止められた。

コナン

「待てよ、灰原・・・」
「うー」

哀
「だつて・・・もう、あなたに私への恋心はない・・・あなたは蘭さんと結ばれるのが運命・・・だから、もう私はいいの・・・」

コナン

「・・・哀。ちょっとひこに来て。」

哀
「(え?今『哀』って・・・)」

コナン

「来い!! 灰原哀!!」

哀
「は、はい!!」

哀はベッドに歩み寄る。

すると、哀の体がフワッと持ち上がった。

哀
「え?」

「ナンは哀を抱き寄せると、やつと哀にキスをした。」

哀
「あ・・・」

哀の顔が、ほんのり紅く染まる。

コナン

「オレがこれを相手は、一番大切な人だつて決まつてるんだ。
哀・・・オレは、オマエが好きだ。」

「哀……オレは、オマエが好きだ。」
コナン

哀

てても、震えが止まらない。

「蘭か・・・アイツには、もう彼氏がいるんだ・・・前に話したろ?
?本堂瑛祐・・・」

哀

コナン

「」の前新一の声で電話した時に、聞かされたんだ。いつもは頼りないけれど、いざという時は蘭の事を真っ先に考えてくれる、優しいヤツだつてな。アイツになら、安心して蘭を任せられる。それに・

哀

「それに？」

コナン

「オレの気持ちはもう、ずっと前からオマエに向いてたんだよ、哀。オマエが転校してきた、その日にな。でも、ずっと気持の整理がつかなかつた。だけど、今だからこそやつと言える・・・哀・・・オレはオマエが好きだ。元に戻れたら・・・いや、もし元に戻れな

くても・・・オレと結婚してほしい。」

「ナンのその言葉に、哀は涙を流した。

哀

「ありがとう・・・ありがとう、工藤君・・・私もあなたが大好き・・・」
「こんな私でいいのなら・・・あなたのお嫁さんにしてください・・・」

「ナン

「喜んで・・・宮野志保・・・」

その後、オレ達は黒の組織を見事壊滅させ、無事に元の姿に戻る事ができた。

そして、オレと志保は結婚し、男女4人の子供に恵まれた。

4人の名前は、瑛蘭、葉平、愛子、秀美。

瑛蘭、葉平は、蘭、瑛祐、平次、和葉の4人に感謝の意を込めて。
愛子の名は、「ナンと哀の思い出を忘れないためにつけた（『哀』
から『愛』にしたのは志保の希望）。

そして最後の秀美は、明美さんと恋人だつた赤井秀一さんの事を忘
れないため。

組織との最後の決戦で、彼はジンと相討ちになり、亡くなってしまった

つた。

そして死ぬ間際、彼は明美さんと恋人同士だった事をオレ達に明かしてくれたのだった。

オレ達は彼を、明美さんと同じ墓に埋葬し、1ヶ月に一回、ジョディさん達と一緒に彼らの墓参りをしている。

まあいろいろあつたけれど、今はこれでよかつたと思つている。

オレはとてもカワイいらしく、美しい王女様に出会えたのだから・・・

ありがとう・・・

いつまでも大好きだよ・・・

ボクだけの・・・王女様。

『ボクだけの王女様』完

ああ、やっと終わったよ・・・

この頃、執筆作品をため込みまくつてゐるからな・・・
今回の話、実は続編があつたりなかつたり。

作者の氣まぐれで、続編の執筆は決まります。
それじゃあ皆さん、別の作品でお会いしましょう。

ボクだけの王女様・イメージソング

オープニングテーマ：プラチナ（カードキャプターさくら）
エンディングテーマ：世界止めて（名探偵コナン）
ラスト・エンディングテーマ：あなたがいるから（名探偵コナン）
瞳の中の暗殺者（スナイパ）
（スナイパ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8406a/>

ボクだけの王女様

2010年10月8日15時07分発行